

第1回科学技術教育（HEST）会議



英国北西部地域の科学技術高等教育会議(HEST)と日本の大学、企業関係者が、日英両国の産学連携のあり方について討議する初のHESTフォーラムが、10月24日（土）、瀧川記念学術交流会館で開かれました。マンチェスター大学など英国北西部での留学経験者でつくるグレーター・マンチェスター・クラブ（会長・松本洋（財）国際文化会館専務理事）が主催で、英国側からはマンチェスター大学やランカスター大学など8大学から17名、日本側からは本学を始め大学関係者および企業関係者約100名の参加者がありました。

当日は、有馬朗人文部大臣の歓迎メッセージに続き、大学院自然科学研究科長佐々木武教授および工学部長北村新三教授の歓迎の辞より始まりました。

フォーラムでは、マンチェスター大学学長のマーチン・ハリス教授が英国北西部の大学と日本との新たな協同研究のあり方を模索する方法として4つの貴重な提言をなされました。副学長の片岡邦夫教授は、日本の科学技術政策の内容に関し、「日本の大学は21世紀に向けて、基礎科学の研究にもっと力を入れるべきで、そのために大学間の国際的な共同研究を促進していかなければならない」と指摘されました。

サルフォード大学のジェームズ・パウエル教授は、学生と企業がテーマを設けて協同研究する制度や、複数の大学が協力して産学連携に取り組むなど、英国での現状を紹介されました。また、シャープ(株)の片岡照榮博士は、英国大学との共同研究の成功例を紹介され、基礎研究の重要性や研究環境の条件など意見を述べられました。最後の総括として、ランカスター大学経営学部長のステファン・ワトソン教授は、今後日本の大学や企業、特に関西地域との深い交流が非常に重要であると述べられました。

この後、1872年にマンチェスター視察の政府使節団を率いた岩倉具視の子孫に当たる岩倉具忠・翔子ご夫妻（京都大学名誉教授）らをお招きし、レセプションが開かれました。岩倉先生は、当時の使節団に係わるお話をエピソードも交えて詳しくご紹介下さいました。

なお、本フォーラムは産学連携策を模索する第一回の日英フォーラムとして注目され、複数の新聞でとりあげられたことも反響の大きさを示しているものと思います。

—自然科学研究科（福田秀樹）—



岩倉具忠氏（京都大学名誉教授）

